

2017年5月15日 全15頁

アセアンの観光事情

タイ、マレーシア、シンガポールが主導し今後も有望

DMS(ヤンゴン駐在)
佐藤清一郎

[要約]

- 世界経済グローバル化の流れを受けて世界の観光市場は、年々、拡大している。1990年、約4億人であった外国人観光客数は、2015年では約12億人と、約3倍になっている。世界観光機関の予測によれば、2030年、外国人観光客数は、約18億人に達するとしている。
- 世界全体の観光収入は、2015年、約1兆2,600億ドルに達した。対GDP比で1.7%の大きさである。国別で見ると、収入が大きい順番で、米国2,050億ドル、中国1,140億ドル、スペイン570億ドル、フランス460億ドルなどとなっており、米国の大きさが際立っている。
- 2015年、アセアンの観光収入は1,080億ドルで、世界全体の8.6%である。観光収入が多い国としては、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアで、観光収入は、それぞれ450億ドル、180億ドル、170億ドル、110億ドル。対GDP比で見ると、それぞれ、11.3%、6.1%、5.7%、1.3%で、インドネシアを除いては、観光収入の経済への寄与は、比較的大きい。
- アセアン域外からの外国人観光客数を見ると、中国の存在感が増している。2011年、アセアン域外外国人観光客数に占める中国の割合は、約17%であったが、2015年には、約30%にまで拡大している。
- 経済成長に伴う所得向上や時間的なゆとりが観光へのインセンティブを高めるとすれば、今後も高い成長が期待できる東南アジア地域の観光市場は有望である。観光への取り組みが遅れている国は、この点を意識して、政策を策定していくべきであろう。
- これまで、アセアンは、生産拠点や物流ネットワークといった観点で見ることが多かったが、成長が持続する中で、豊かになってきているのは事実であり、今後、観光地域という視点で見ること大切となってくるであろう。

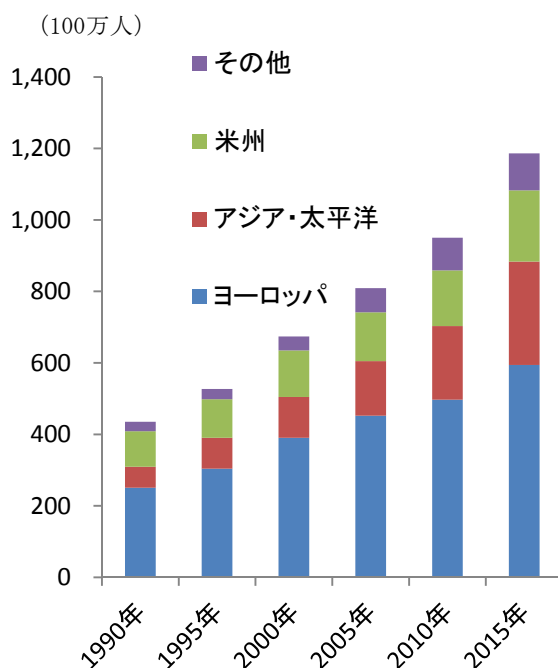
1. 世界の観光事情

(1) 観光市場は年々拡大 ～アジア・太平洋地域の伸びが高い～

1989年のベルリンの壁崩壊、その後の東西世界融合の動きに伴って、世界経済はグローバル化の流れへと動き出した。グローバル化の流れを確実なものとしている背景には、航空機、船など輸送手段の発達、インターネット普及を通じた情報収集力向上、二国間・多国間での投資貿易協定締結による国家間の親密化の動きなどがある。こうした大きな流れを追い風に、世界の観光市場は年々拡大を続けている。この流れを鑑み、観光を戦略的に位置づける国も増えてきており、それが、観光市場の更なる拡大を促している。

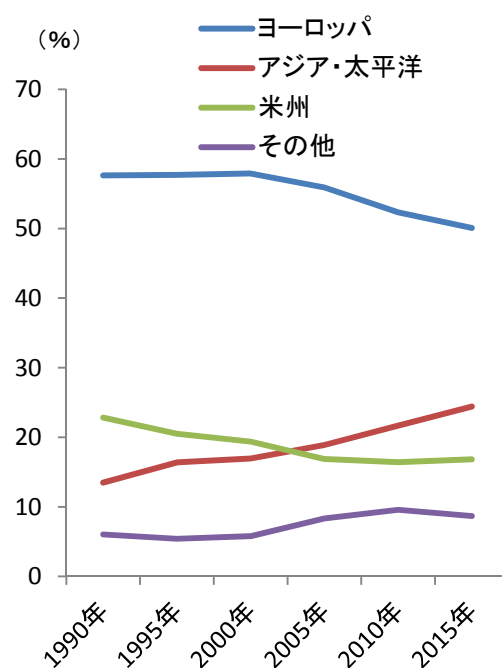
世界全体の外国人観光客数は、1990年、約4億人であったが、2000年には約7億人に増加し、2015年には約12億人となっている。25年をかけて、約3倍の大きさにまで拡大してきている状況である。外国人観光客数の地域別割合を見ると、1990年、ヨーロッパ約58%、アジア・太平洋約13%、米州約23%であったが、2015年には、それぞれ、約50%、約24%、約17%となっている。割合の変化を見ると、ヨーロッパが8%ポイント、米州が6%ポイントの低下となっている一方で、アジア・太平洋は11%ポイントと大幅な上昇となっている。世界観光機関によれば、アジア・太平洋の伸びが最も高い動きは今後も続くとしており、2030年、外国人観光客数は約18億人に達する内、アジア・太平洋地域が、約30%にあたる約5億3,500万人を占めるとしている。

図表1 外国人観光客数の推移



出所：世界観光機関より DMS 作成

図表2 外国人観光客数の地域別割合推移



出所：世界観光機関より DMS 作成

(2) 地域別観光収入 ～ヨーロッパが一番多い～

2015 年における世界全体の観光収入は、1 兆 2,600 億ドルになった。対 GDP との比較では、約 1.7%となっている。世界全体の観光収入は、2011 年に初めて 1 兆ドルを超えて以来、順調な拡大が続いている。2015 年の観光収入を地域別で見るとヨーロッパが 4,510 億ドル（全体の 35.8%）、アジア・太平洋が 4,180 億ドル（同 33.2%）、米州 3,040 億ドル（同 24.1%）、アフリカ 330 億ドル（同 2.6%）、中東 540 億ドル（同 4.3%）となっている。

図表 3 地域別観光収入（2015 年）

	観光収入(10億ドル)	割合(%)
ヨーロッパ	451	35.8
北ヨーロッパ	78	6.2
西ヨーロッパ	146	11.6
中央・東ヨーロッパ	50	4.0
南・地中海ヨーロッパ	176	14.0
アジア・大洋州	418	33.2
北東アジア	237	18.8
東南アジア	108	8.6
オセアニア	42	3.3
南アジア	31	2.5
米州	304	24.1
北アメリカ	239	18.9
カリブ海	28	2.2
中央アメリカ	12	0.9
南アメリカ	26	2.0
アフリカ	33	2.6
北アフリカ	9	0.7
サハラ以南地域	24	1.9
中東	54	4.3
世界全体	1,260	100.0

出所：世界観光機関より DMS 作成

ヨーロッパが観光収入が一番多い地域となっているのは、ギリシャのアテネ、イタリアのローマ、フィレンツェをはじめとして、様々な歴史的な遺跡が多く存在する国が多いことや、地中海周辺地域は温暖な気候で保養に適しているため、アジア、ロシア、北米、南アメリカなど

世界中から観光に訪れる人が多いためと思われる。一方で、中東やアフリカに関しては、かなり小さな割合となっている。これらの地域は、安全面や衛生面などを含め、観光という視点では、様々な問題が残る国が多いためであろう。

地域を更に詳しく見ると、ヨーロッパでは、南・地中海ヨーロッパが 1,760 億ドルと最も大きく、次が西ヨーロッパで 1,460 億ドルとなっている。やはり気候的に温暖で海も綺麗、そして、美味しいシーフードが沢山ある地中海周辺は人気のようである。アジア・太平洋では、北東アジアが最も大きく 2,370 億ドルとなっている。後述のように、これは中国の貢献が極めて大きい。中国は、北京、上海、大連、西安などをはじめ歴史的に魅力ある都市が沢山存在しており観光客の魅力をひきつけている。北東アジアに次いで大きいのは東南アジアであるが、その額は 1,080 億ドルとかなり少なくなる。米州については、北アメリカが最も大きく 2,390 億ドルである。後述のように、これは米国の貢献がほとんどと言ってよい。北アメリカ以外の地域は小さな金額である。

(3) 観光収入上位国 ～米国が他国を大きく引き離し 1 位～

2015 年の観光収入を収入が多い順番で見えていくと、米国、中国、スペイン、フランス、英国、タイ、イタリア、ドイツ、香港、マカオなどとなっている。それぞれに代表的な観光資源（博物館や美術館、歴史的建造物、魅力的町並み、国立公園、都市部でのエンターテインメント、グルメ、ビーチリゾート、温暖な気候など）のいずれか、それとも全部を有する国々ばかりであり、納得のいく順番であると言えよう。ここで興味深いのは、上位 3 ヶ国に限っては観光収入に大きな格差が存在することである。米国と中国の間では 91 億ドルの開きがあり、中国とスペインの間には 57 億ドルの開きがある。米国が圧倒的な観光収入を得ているわけだが、対 GDP 比で見ると 1.1%にすぎず世界平均の 1.7%を下回っている。上位 3 ヶ国の中で、観光収入の対 GDP 比が一番大きいのはスペインで 4.8%となっている。他のヨーロッパの国と比較しても、この数値は大きなものとなっている。スペインには、バルセロナ、マドリード、セビリア、グラナダ、コルドバなど魅力的な都市が数多くあることや、フラメンコの文化、そして南部は地中海性気候で冬でも温暖な気候であることなどが人々を引き付けているのだろう。4 位のフランスは、外国人観光客数では、約 8,400 万人（2015 年）で、スペインの約 6,800 万人（2015 年）を凌いで、ヨーロッパで首位、そして、世界でも首位であるが、収入では、スペインの次となっている。ヨーロッパ主要国の中で、ドイツの観光収入が一番少ないのも面白い。ドイツの外国人観光客数は、約 3,500 万人（2015 年）で、英国の約 3,400 万人より少し多いが、収入の順位は、スペイン、フランス、英国、イタリアよりも下位に位置している。ドイツは優れた技術をもとに製造業では競争力があるが、観光に限っては、ベルリン、ミュンヘン、ロマンティック街道、ケルン大聖堂、ライン川クルーズなどを有するものの、他のヨーロッパ主要国にやや劣るかもしれない。10 位のマカオは、観光収入が GDP の 7 割弱に達しており、まさに観光が最重要産業となっている。日本は 13 位で、250 億ドルの観光収入を得ている。以前、日本は外国人観光客数が多くないことが悩みであったが、過去数年の積極的な外国人観光客呼び込み政策の

結果、観光収入は、2010年の132億ドルから約2倍と大きく増加している。この動きは、世界的に見ても際立っている。ただ、対GDP比で見ると0.6%と世界平均の1.7%を大きく下回っているため、今後、更に増加していく余地は大きいのではないかと思われる。

図表4 観光収入の上位国 (2015年)

	観光収入(10億ドル)	名目GDP(10億ドル)	対GDP比(%)
米国	205	18,037	1.1
中国	114	11,226	1.0
スペイン	57	1,194	4.8
フランス	46	2,420	1.9
英国	46	2,863	1.6
タイ	45	399	11.3
イタリア	39	1,826	2.1
ドイツ	37	3,365	1.1
香港	36	309	11.7
マカオ	31	45	68.9
オーストラリア	29	1,230	2.4
トルコ	27	859	3.1
日本	25	4,382	0.6
インド	21	2,088	1.0
マレーシア	18	296	6.1
メキシコ	18	1,151	1.6
シンガポール	17	297	5.7
アラブ首長国連邦	16	370	4.3
カナダ	16	1,553	1.0
韓国	15	1,383	1.1
台湾	14	525	2.7
インドネシア	11	861	1.3
サウジアラビア	10	652	1.5
世界全体	1,260	74,197	1.7

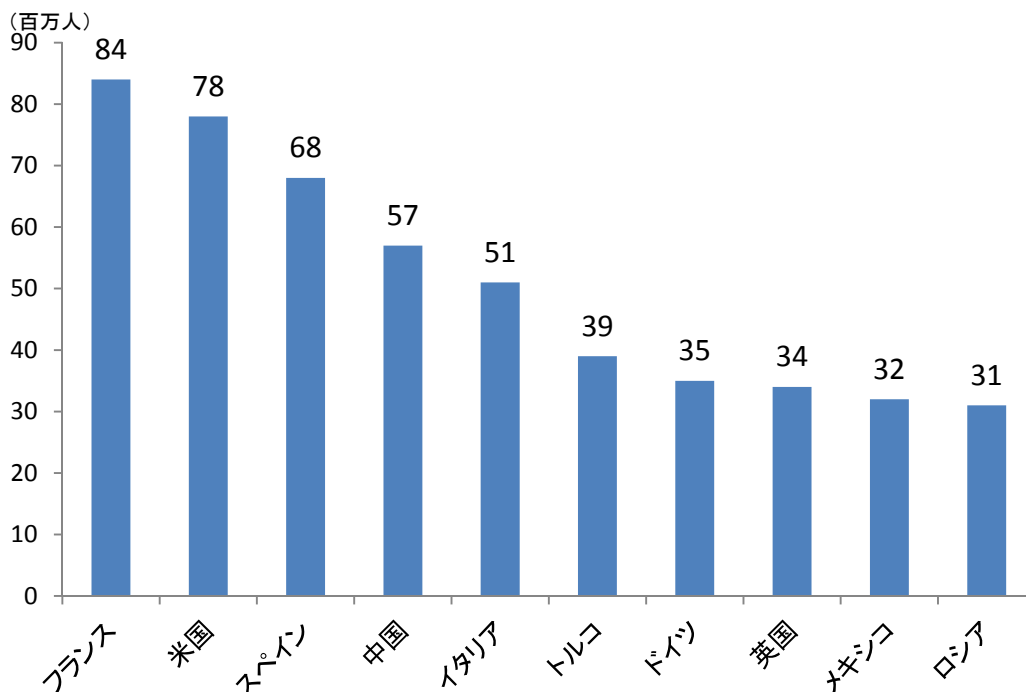
出所：世界観光機関より DMS 作成

アセアン加盟国に目を向けると、6位に位置しているタイの次に観光収入が多いのは、マレーシアで15位、その次がシンガポールで17位、そしてインドネシアで22位となっている。観光収入は、それぞれ、180億ドル、170億ドル、110億ドルで、タイの450億ドルと比較すると大きな開きがあり、タイの凄さがわかる。観光収入の対GDP比は、それぞれ、6.1%、5.7%、1.3%で、インドネシアを除いて、経済に占める観光収入の割合は高く、観光は重要な産業となっているのがわかる。

実際に、マレーシア、シンガポールでは、観光を重要産業と位置づけ、戦略的な開発政策を

行っている一方で、インドネシアに関しては、観光政策に関して、積極的なコミットメントが見られなかった。最大の観光資源と思われるバリ島の開発に関しては、空港新設、海にまたがるハイウェイ建設、新たなビーチ開拓などが行われているものの、開発のスピードは比較的緩やかな印象である。輸出の約 4 割を鉱物資源が占めている資源国であるという経済構造が影響しているかもしれない。しかし、2014 年に誕生したジョコ・ウィドド大統領による新政権になってから、観光資源開発に積極的な政策を打ち出している。政策の大きな柱は、バリ島やバタム島などの外国人に知られた観光地以外で、7つの観光戦略地域（北スマトラのトバ湖、ブリトゥン島のタンジュン・クラヤン、ジャカルタ近郊のプロウ・スリブ、中部ジャワのボロブドゥール、東ジャワのプロモテンゲル・スメル、東ヌサトゥンガラララブハン・バジョー、南スラウェシのワカトビ）、3つの観光経済特区（バンテンのタンジュン・ルスン、西ヌサトゥンガラのマンダリカ、北マルク・モロタイ）の合計 10 の地区を指定して、外国人観光客を呼びこもうとするものである。指定された地域は、プロウ・スリブやボロブドゥールを除いては、ほとんど外国人に知られていない場所だが、それぞれに、美しい自然や海を有しており、観光資源としては魅力あるものばかりである。そのため、今後の開発のやり方次第では、新たなインドネシアということで外国人観光客が大幅に増加してくる可能性も否定できない。そのため、世界で 22 位（2015 年）の観光収入の順位は、今後、上がってくる可能性が高い。

図表 5 外国人観光客数上位 10ヶ国（2015 年）



出所：世界観光機関より DMS 作成

2. アセアンの観光事情

アセアンには、製造業を中心に多くの日本企業がコスト削減や国内市場狙いで進出しており、アセアン域内には、大規模な生産ネットワークが構築されている。各企業は、このネットワークを駆使して、何処の国で何を生産するのが最も効率的なのかを考えながら資源の最適な配分を実施している。

こうしたことで、アセアン地域は、どちらかと言えば生産基地として見られることが多いが、前述のように、2015年、アセアンの観光収入は1,080億ドルで世界全体の8.6%を占めている。この割合は小さいようにも思えるが、GDPの大きさでは、アセアンは、世界全体の約3.3%を占めるにすぎないので、それを考えると、観光収入の割合は、それを大きく上回っていることになり、観光地域といっても良いのである。

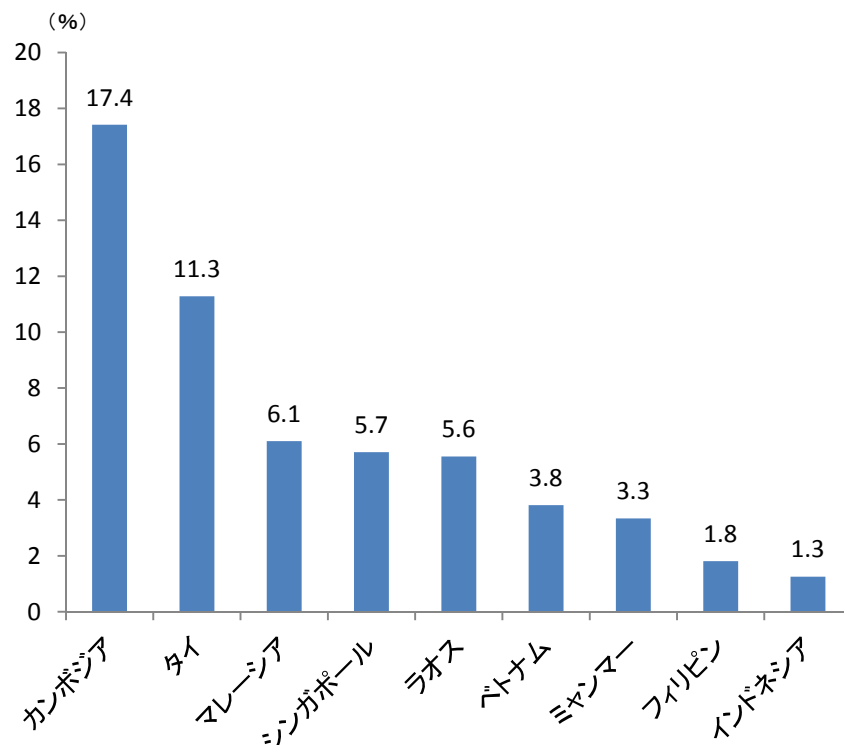
(1) GDPに占める観光収入割合 ～カンボジアが大きい～

アセアン各国で観光収入がどの程度自国の経済にとって影響があるのかを比較するために、2015年で、各加盟国の観光収入に占める対GDPの大きさを調べると、大きい国としては、カンボジア17.4%、タイ11.3%があげられる。カンボジアには、アンコールワットとアンコールトムという有名な遺跡があり、観光収入のほとんどはこの地域で稼いでいると思われるが、観光収入という点ではそれほど大きくないので、経済全体に占める観光収入の割合が高いのは、どちらかと言えば、長年にわたる内乱により製造業などの経済基盤が弱いことが影響している。タイに関しては、アセアンの中で資本蓄積が最も進んでいる工業国だが、前述のように様々な観光資源も有していることで数値が高くなっている。

これらに次ぐ国としては、マレーシア、シンガポールとなっているが、対GDP比は、カンボジア、タイと比較すると、かなり小さく、観光国としては、やや劣る印象である。ただ、観光収入では、世界的に見ても上位に位置している国々であるため、アジアの代表的な観光国であることに変わりはない。

こうした一方で、観光収入のランキングが上位に入っていない国は、ラオス、ベトナム、ミャンマー、フィリピンである。この内、対GDP比は、ラオスが一番大きく5.6%となっている。ラオスは、人口が少ないことで本格的な製造業立地には適していないことで工業化が進展していないため、結果として、観光の割合が相対的に高くなっていると思われる。ただ、カンボジアのアンコールワットのような有名な遺跡が存在しないことや、ラオスへのアクセスやラオス国内での観光地へのアクセスが不便なため観光収入は伸びず、対GDP比は小さな値となっていると思われる。ベトナムやミャンマーは、3%台に留まっており、他の国と比較して観光に依存している印象ではない。フィリピンも、1.8%と小さな数値となっており、観光の寄与は小さい。これは、治安の悪さやセブ島以外に有名な観光資源がないことが影響していると思われる。

図表6 観光収入の対 GDP 比（2015 年）



注：ブルネイの 2015 年の数値はなし
出所：アセアン事務局より DMS 作成

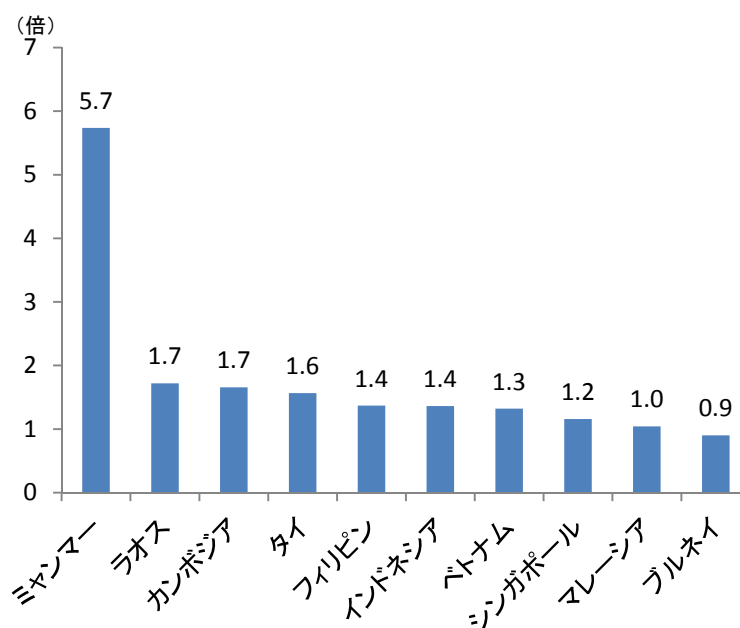
(2) アセアンへの外国人観光客数 ～タイ、マレーシア、シンガポールが多い～

アセアンへの外国人観光客数は、2011 年約 8,100 万人であったが、2015 年には約 1 億 890 万人と約 1.3 倍に増加した。加盟国別で見ると、ミャンマーが約 81 万人から約 470 万人と約 5.7 倍の大幅増加となった。これは、2011 年以降の民主化の動きの中で対外開放が進んだことが大きな要因である。ミャンマー以外の国は、ラオス、カンボジア、タイ等が高いグループに属するが、ミャンマーほどの増加率ではない。2011 年以降ということ言えば、ミャンマーが極めて特殊な動きだったと言えるだろう。

2015 年におけるアセアンへの外国人観光客数を多い順番で見ると、タイ 3,000 万人、マレーシア約 2,600 万人、シンガポール約 1,500 万人、インドネシア約 1,000 万人などとなっている。タイはアユタヤ遺跡などの世界遺産のほか、プーケット、パタヤ、サムイなど有名ビーチ、そして、ニューハーフショー、ムエタイ観戦、古典舞踊鑑賞などを含めバンコク市内における様々なエンターテインメントなどがあるため、世界の人々を引き付けていると思われる。また、スワンナプーム国際空港からは、ヨーロッパやアジアの他地域への直行便が数多く存在しておりアクセスの良さも魅力となっている。マレーシアは、首都クアラルンプールのブキビンタン地区、世界遺産マラッカ、コタキナバル、ペナン島、ランカウイ島などのビーチリゾートの他、蜚鑑賞ツアー、自然アクティビティツアーなどエコツーリズム、技術レベルの高い病院を有す

る医療ツーリズムなどで外国人を呼び込んでいる。生活費が安く医療も充実していることで、リタイアした外国人にも人気がある。また、クアラルンプールの国際空港は、シンガポールやタイほどの大きさではないが、ある程度ハブとして機能しており、観光産業を後押ししている。シンガポールは、「ユアシンガポール」を基本コンセプトとした総合リゾート「マリーナベイ・サンズ」、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールを有する「リゾート・ワールド・セントーサ」の他、医療ツーリズムを目指した高品質の医療サービス提供などが人々に魅力を与えている。また、チャンギ国際空港の立地やインフラが極めて利便性が高いため、タイのスワンナプーム国際空港と並んでハブとして利用する人が多いことも、外国人集客に貢献している。インドネシアに関しては、代表的ビーチリゾートであるバリ島の他、世界遺産のボロブドゥール寺院、貴重な南国植物が残るボゴール植物園、ジャカルタ、バンドン、スラバヤなどの都市がある。バリ島は、ビーチでのアクティビティの他、アジア域内でも競争力あるエステ・マッサージが多数ある。また、国際会議開催場所としても度々利用されており、外国人観光客の集客に大きく寄与している。

図表7 2011年と2015年の外国人観光客数比較



出所：アセアン事務局より DMS 作成

一方で、外国人観光客数がそれほど多くないのは、ベトナム、フィリピン、ミャンマー、ラオス、カンボジアなどである。ベトナムには、ハノイ、ホーチミンの主要都市の他、ビーチリ

ゾートがあるダナン、歴史ある都市フエ、ハロン湾、メコンデルタ、ミャンマーには、ヤンゴン、マンダレーの主要都市のほか、バガン、バゴー、チャイティーヨー、インレー湖、カンボジアにはアンコールワット、アンコールトム、ラオスにはルアンパバーンなどの代表的な観光資源が存在するため、もう少し観光客数が伸びても不思議ではないが、これらの国では、空港での入出国手続き、道路事情を含めた観光地へのアクセス、ホテル内の設備やサービス、治安などが観光客のストレスとなっていることも多いため、そうした点が、観光客が避ける理由となっているかもしれない。

図表 8 アセアンへの外国人観光客数の推移 (単位：千人)

	2011年			2012年			2013年			2014年			2015年		
	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体
ブルネイ	124	118	242	116	93	209	3,054	226	3,279	3,662	223	3,886	119	99	218
カンボジア	1,101	1,781	2,882	1,514	2,070	3,584	1,832	2,379	4,210	1,992	2,511	4,503	2,098	2,677	4,775
インドネシア	3,258	4,391	7,650	2,608	5,437	8,044	3,516	5,286	8,802	3,684	5,752	9,435	3,861	6,546	10,407
ラオス	2,191	532	2,724	2,712	618	3,330	3,041	738	3,779	3,224	935	4,159	3,589	1,096	4,684
マレーシア	18,885	5,829	24,714	18,810	6,223	25,033	19,106	6,610	25,716	20,373	7,064	27,437	19,147	6,575	25,721
ミャンマー	100	716	816	151	908	1,059	219	1,826	2,044	1,598	1,483	3,081	1,763	2,918	4,681
フィリピン	332	3,586	3,917	375	3,898	4,273	422	4,259	4,681	461	4,372	4,833	482	4,879	5,361
シンガポール	5,372	7,799	13,171	5,733	8,758	14,491	6,115	9,453	15,568	6,113	8,982	15,095	5,748	9,483	15,231
タイ	5,530	13,568	19,098	6,463	15,891	22,354	7,410	19,136	26,547	6,620	18,160	24,780	7,886	21,995	29,881
ベトナム	838	5,176	6,014	1,364	5,484	6,848	1,440	6,132	7,572	1,495	6,379	7,874	1,301	6,643	7,944
アセアン全体	37,733	43,496	81,229	39,845	49,380	89,225	46,154	56,045	102,199	49,223	55,861	105,084	45,992	62,912	108,904

出所：アセアン事務局より DMS 作成

図表9 アセアンの外国人観光客数の域内・域外割合 (単位：%)

	2011年			2012年			2013年			2014年			2015年		
	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体	域内	域外	全体
ブルネイ	51.2	48.8	100.0	55.5	44.5	100.0	93.1	6.9	100.0	94.2	5.7	100.0	54.6	45.4	100.0
カンボジア	38.2	61.8	100.0	42.2	57.8	100.0	43.5	56.5	100.0	44.2	55.8	100.0	43.9	56.1	100.0
インドネシア	42.6	57.4	100.0	32.4	67.6	100.0	39.9	60.1	100.0	39.0	61.0	100.0	37.1	62.9	100.0
ラオス	80.4	19.5	100.0	81.4	18.6	100.0	80.5	19.5	100.0	77.5	22.5	100.0	76.6	23.4	100.0
マレーシア	76.4	23.6	100.0	75.1	24.9	100.0	74.3	25.7	100.0	74.3	25.7	100.0	74.4	25.6	100.0
ミャンマー	12.3	87.7	100.0	14.3	85.7	100.0	10.7	89.3	100.0	51.9	48.1	100.0	37.7	62.3	100.0
フィリピン	8.5	91.5	100.0	8.8	91.2	100.0	9.0	91.0	100.0	9.5	90.5	100.0	9.0	91.0	100.0
シンガポール	40.8	59.2	100.0	39.6	60.4	100.0	39.3	60.7	100.0	40.5	59.5	100.0	37.7	62.3	100.0
タイ	29.0	71.0	100.0	28.9	71.1	100.0	27.9	72.1	100.0	26.7	73.3	100.0	26.4	73.6	100.0
ベトナム	13.9	86.1	100.0	19.9	80.1	100.0	19.0	81.0	100.0	19.0	81.0	100.0	16.4	83.6	100.0
アセアン全体	46.5	53.5	100.0	44.7	55.3	100.0	45.2	54.8	100.0	46.8	53.2	100.0	42.2	57.8	100.0

出所：アセアン事務局より DMS 作成

(3) 域内・域外別の外国人観光客数 ～中国からの観光客が大幅増加～

アセアンの外国人観光客数を域内と域外で見ると、域外からの観光客の割合が、やや増加してきている。その主な要因は、中国や韓国からの観光客数の増加である。アセアン域外からの外国人観光客数に占める中国の割合は、2011年、約17%であったが、2015年には約30%にまで高まっている。中国とアセアンは経済的つながりを深めていく過程で、貿易取引は年々増加してきており、旅行者数の増加も、そうした動きに連動したものとなっていると思われる。韓国からの旅行者数割合は、2011年約8.9%から2015年約9.3%に上昇してきている。中国ほどのスピードはないものの着実に存在感を高めていると言ってよい。こうした一方で、欧州(16.9%→15.2%)、オーストラリア(9.0%→6.7%)、日本(8.4%→7.5%)、インド(6.2%→5.3%)、ロシア(3.0%→2.4%)などは割合を低下させている。

アセアン加盟国別で、域内と域外の外国人観光客数の割合を見ると、フィリピン、ベトナム、タイ、インドネシア、ミャンマーが域外からの観光客の割合が高い。一方で、ラオス、マレーシアは域内からの観光客の割合が高い。フィリピンについては、島国で、かつ、他のアセアンの国から離れている立地のために、域外からの割合が9割を超える状況となっているのだろう。ラオスに関しては、マレー半島の内地に位置して、交通のアクセスが悪く、また、ビーチリゾ

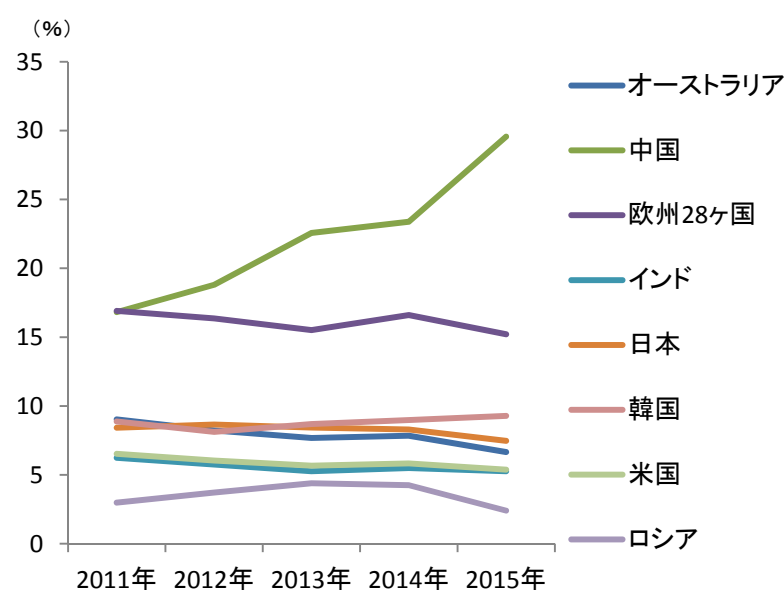
ートもないため欧州などの人には人気がなく、域内の割合が高くなっていると思われる。マレーシアに関しては、イスラム教国のアジアでのゲートウェイとして中東からの観光客が増加しているものの、シンガポールを経由して入国するケースが多く域内の割合が高くなっていると思われる。

図表 10 アセアン域外からの外国人観光客数の推移 (単位：千人)

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
オーストラリア	3,926	4,060	4,303	4,384	4,191
カナダ	594	709	769	800	834
中国	7,316	9,283	12,651	13,059	18,596
欧州28ヶ国	7,355	8,079	8,695	9,275	9,570
インド	2,711	2,840	2,946	3,071	3,308
日本	3,664	4,275	4,724	4,634	4,703
ニュージーランド	390	358	439	458	475
韓国	3,862	4,011	4,873	5,018	5,839
米国	2,838	2,984	3,178	3,254	3,382
ロシア	1,299	1,835	2,460	2,378	1,513
その他	9,539	10,946	11,006	9,529	10,501
域外全体	43,496	49,380	56,045	55,861	62,912

出所：アセアン事務局より DMS 作成

図表 11 アセアン域外からの外国人観光客数の割合推移



出所：アセアン事務局より DMS 作成

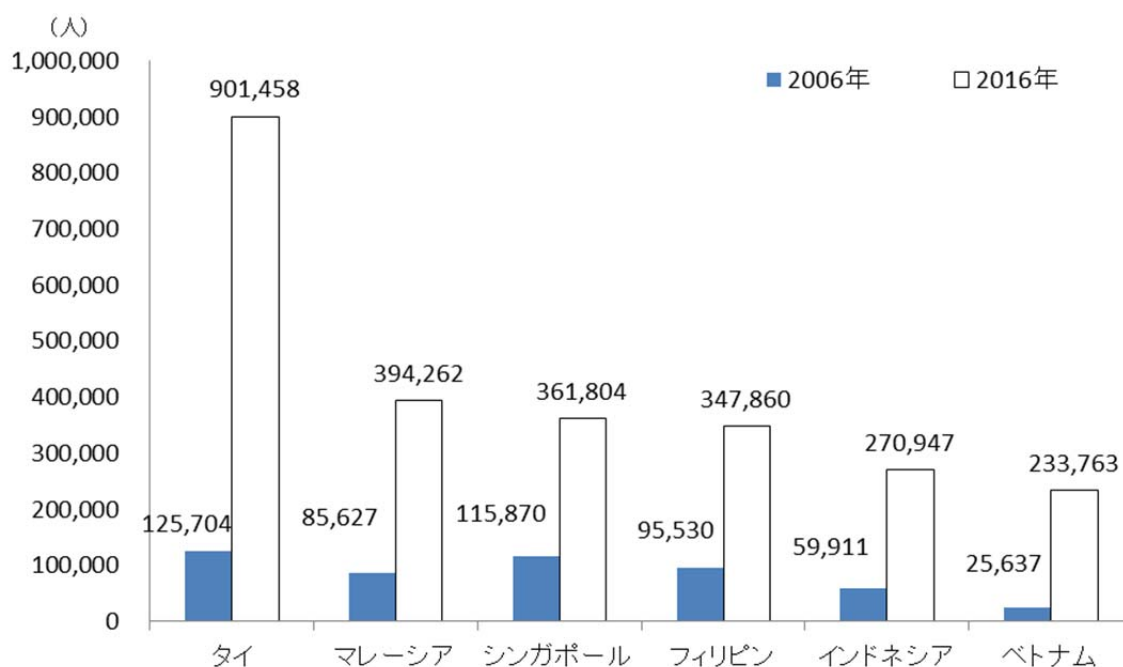
(4) アセアンから日本への観光客は大幅増加中

経済の発展とともに、人々の所得が増加して豊かな生活を享受できるようになると、旅行な娯楽を楽しむ人々が増えてくる。アセアン各国は、概ね順調な経済拡大を続けながら、豊かな社会へと向かっていることで、旅行をする人々の数は年々増えてきている。日本は、アセアンの国々の国民が訪れることが多い国の一つである。これは、日本文化への憧れや東南アジアとは異なる気候、そして清潔感などが影響していると思われる。

日本政府観光局のデータから、2016年におけるアセアンの主な国々の日本への観光客数の動きを見ると、一番多く訪れている人数が多い順番で、タイ約90万人、マレーシア約40万人、シンガポール約36万人、フィリピン約35万人、インドネシア約27万人、ベトナム約23万人となっており、タイが突出した状況となっている。

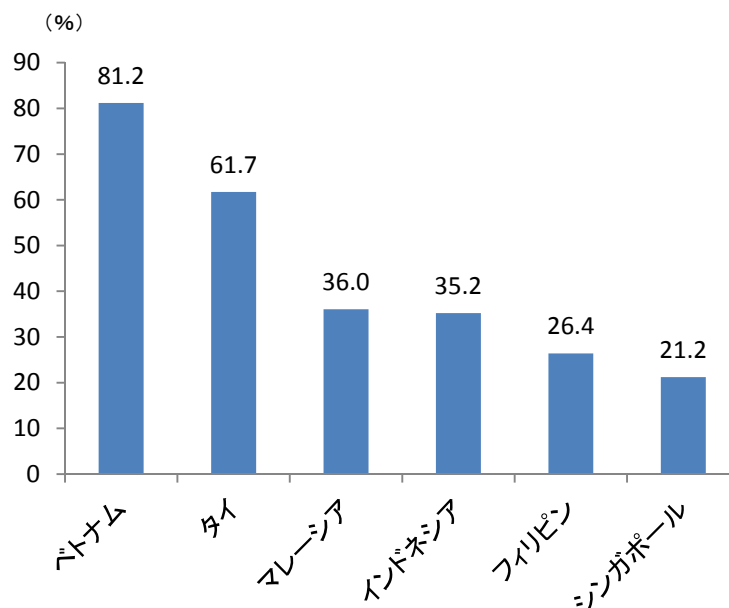
2006年と2016年で日本への観光客数の年平均伸び率を見ると、一番高いのがベトナムで81.2%、次がタイで61.7%となっている。この2カ国の伸び率が際立っており、マレーシアやインドネシアは30%台となっている。ベトナムやタイには多くの日本企業が進出していることもあり、現地の人々の日本や日本製品への憧れが強いことが影響しているのだろう。一方で、マレーシアやインドネシアに関しては、イスラム教国ということで、日本のインフラが、やや不便に感じることもあり、伸びが低目となっているのだろう。ただ、日本政府は、ハラルなどイスラム教国からの観光客への対応を進めており、それが広がっていけば、これらの国からの観光客も増加してくることが期待される。

図表 1 2 アセアン主要国から日本への観光客数



出所：日本政府観光局より DMS 作成

図表 13 日本への観光客数の年平均伸び率 (2006/2016)



出所：日本政府観光局より DMS 作成

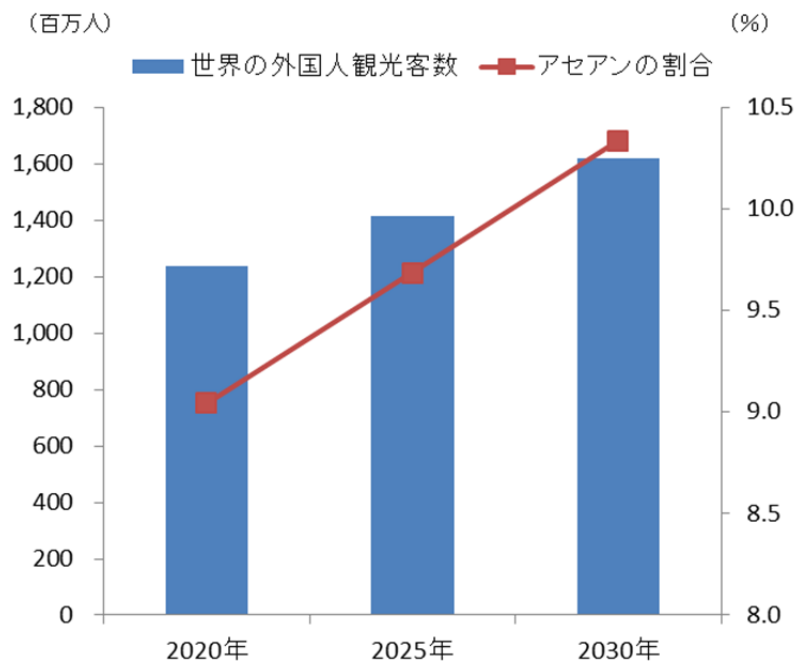
3. 今後も有望なアセアン観光市場

経済成長に伴う所得向上や時間的なゆとりが観光へのインセンティブを高めるとすれば、アセアンの観光市場の将来は、極めて有望と言える。何故なら、アセアンは、世界で最も成長が期待されている地域の一つだからである。世界観光機関の予測によれば、2020-30年における、外国人観光客数の年平均増加率は、世界が2.9%であるのに対して、アセアンは4.3%となっている。この結果、2030年の世界の外国人観光客数約18億人の内、アセアンへの外国人観光客数は、約1億9,000万人と世界全体の10%を超えてくるとしている。

こうした予測も踏まえ、アセアン事務局では、長期の視点に立った観光産業育成戦略を策定している。戦略の主な柱としては、(1) プロモーション、マーケティング、(2) 旅行商品の多様化、(3) 魅力ある観光に向けた投資、(4) 観光に従事する人材育成、(5) 観光の質的レベル向上などである。これらの項目について、それぞれ期間別にアクション・プランが設定されており、今後、これらが、着実に実施に移されることを期待したい。

観光産業を加盟国別で見ると、経済発展の格差が存在するのと同様に観光ビジネスについても格差が存在する。観光ビジネスが先行しているのは、タイ、マレーシア、シンガポールで、遅れているのは、ベトナム、ミャンマー、ラオス、カンボジアである。たとえば、ミャンマーの観光地を例にとると、ビーチリゾートでのホテル設備は、インドネシア、タイ、マレーシアと比較して相当に劣っている印象である。また、観光地までのアクセスに関しても、ガタガタ道をかなりの時間をかけて移動しないといけないことが多い。

図表 14 世界の外国人観光客数とアセアンの割合



出所：アセアン事務局より DMS 作成

観光分野に関しては、経済全体が順調な拡大を続け、財政面である程度余裕が出てきたら、是非とも改善すべきインフラは多数存在する。先行している国は、更に高品質のサービスを提供すべく努力し、後れを取っている国は、観光の将来的な有望さを再認識して、早急に、適切な政策を実施していくことが望まれる。経済開発にあたっては、工業化が基本戦略とはなるが、サービス化が進展していく過程にあっては、観光も外貨獲得の重要なツールとなる。

これまで東南アジアは、生産拠点や物流ネットワークの観点から見るが多かったが、成長が継続する過程で豊かになってきているのは事実であり、今後は、観光地域という視点で見ることも大切となってくるであろう。日本としても、今後、アセアン各国には潜在的な外国人観光客がどんどん生まれてくることに鑑み、現地での広報活動などを通じて、日本の魅力を発信していくことが更に求められると思われる。